

第104回国試 バランス良く出題

私立薬大協が報告書

日本私立薬科大学協会は、第104回薬剤師国家試験の検討結果について報告書をまとめた。国試に関しては、「全出題領域にわたって、基礎学力を問う問題から思考力・応用力を要する問題までバランス良く出題されていた」と総括した。また、出題内容の誤りや国試としての妥当性への疑問、不自然な状況設定などがあったと指摘。今後の問題作成に反映させるよう厚生労働省に求めた。

報告書では、2月23日と24日に実施された第104回国試について、「七つの全出題領域にわたって基礎学力を問う問題から思考力・応用力を要する問題までバランス良く出題されていた」と総括。具体的には、「グラフ・図・化学構造などの与えられた情報から総合的に判断・考察する力が要求される問題が多く、総合するとほぼ適切」「最近の社会情勢を加味した問題や図表から情報を読み取る形式の問題が多く、しっかりと理解した上で考えさせる工夫

された良問が多かった」などと総評した。

ただ、理論問題については、物理・化学・生物、衛生の4連問は「応用問題としてよく考えられた良問」と評価しつつ、こうした題材は限られることから、今後細かい知識を問うことにならないよう求めた。

4連問以外にも、薬理における化学構造の出題や薬理と病態・薬物治療の連問など領域間の連携を高く評価。実践問題についても、基礎と臨床(実務)の複合性が高まり、臨床における基礎の重要性が感じられる良問が増えたとし、「今後もこのような出題を続けてもらいたい」と要望した。

一方、第104回国試でも、厚労省が採点に当たって考慮した問題と公表した問題以外に、誤りがあると判断された問題、問題の観点から不適切である問題があったと指摘。今後の問題作成に反映するよう厚生労働省に求めた。

かかりつけ、地方で浸透せず

中医協 無薬局町村の問題も指摘

中央社会保険医療協議会は7月10日に開催した総会で、2020年度診療報酬改定に向け、地域包括ケアシステムにおける医療のあり方について議論した。複数の委員が地域医療での薬局・薬剤師の役割に言及。地方でかかりつけ薬剤師制度の浸透が進んでいないことや、薬局が設置されていない「無薬局町村」の問題に関心がない自治体がある現状を指摘する声が上がった。

厚生労働省は、18年度診療報酬改定において地域包括ケアシステムの中で地域医療に貢献する薬局を新たに「地域支援体制加算」で評価し、医療資源が少ない地域の薬局を評価対象としたことを説明。また、全国約150の町村で薬局が設置されてお

らず、薬局薬剤師数に地域差がある実態などを示した。

染谷絹代委員(静岡県島田市長)は、多くの患者が診療所の門前薬局を使用している地方の実態を挙げ、「かかりつけ薬剤師制度を推進しているが、現実には難しいのが現状」と指摘。また、山間部の居住患者は医療機関までの交通手段が限られ、苦労しているとの現状を紹介し、「地域医療構想の理念に沿った診療報酬の見直しをお願いしたい」と注文をつけた。

これに対して、有澤賢二委員(日本薬剤師会常務理事)は「患者と薬剤師できちんと対話が行われれば、薬剤変更で体調が悪くなったなどの情報を薬剤師はしっかりと把握してい

考えよう!

キャリアデザイン



キャリア・ポジション社長

西鶴 智香

薬剤師には何ができる?

②

薬剤師が国民医療費抑制に何ができるかについて、前号で看護学生が「国民はまず病院に行く前に薬局薬剤師に相談したらいい。軽症ならば市販薬を選べばいいし、症状の程度により病院に行くという選択をすればいい」という提案をしてくれたと紹介しました。こうなると必要以上に保険を使わなくてもいいですし、薬局薬剤師が今以上に仕事にやりがいを感じられるようにもなりますし、ぜひとも実現してほしいと思っています。

しかし実際には多くの国民は、自分の体調に違和感を覚えた時にはまず医師のもとを訪ねます。どうしたら、医師より薬局薬剤師のもとへ相談に来てくれるようになるのでしょうか?

一つは、薬代の保険適応を変える方法があります。市販薬として既に販売されている抗アレルギー薬や抗炎症湿布剤、漢方薬などを保険適応から外し、医師の診察料と薬代の自己負担額が市販薬の購入費より格段に高くなれば、国民の行動は変化するでしょう。

ほかには「リフィル処方箋」を導入する方法があります。生活習慣病など比較的症状が安定している長期

服薬患者には、医師ではなく薬剤師が指導するようになれば、薬の専門家としての薬剤師の存在はもっと意識されるようになります。

ところで国民は「かかりつけで頼れる、相談したい薬剤師」をどうやって探せばいいのでしょうか。時々、処方箋を持ち込んだ「薬局」で?もしくは化粧品を買いに行くドラッグストアで?そもそも国民は、服薬法を伝えてくれる以外に薬剤師がどんなふう自分の役に立つのかよく知らないから、「かかりつけ薬剤師」を見つけようとしていないのではないのでしょうか。

薬局薬剤師はもっと国民に対し「体調が気になれば、いつでも相談に乗りますよ」「いつでも来て下さいね」と常に声をかけ、「健康の相談員」として認知してもらうことが、最優先でやるべきことです。自分が薬剤師になったら「職業・薬剤師」のどこをどう変えたいか。学生の今から考えることが、自身のキャリアデザインにつながるはずです。

るので、地域住民の目線でかかりつけ薬剤師を選んでもらいたい」とかかりつけ機能の重要性を強調した。

無薬局町村に関しては、間宮清委員(日本労働組合総連合会「患者本位の医療を確立する連絡会」委員)が「在宅医療を考えると、地域の薬剤師にかかりつけ薬剤師として活躍してもらうことは患者にとって頼りになる。無薬局町村を減らす取り組みを検討すべき」との考えを述べた。

有澤氏は「薬剤師が常駐できる薬局を置きたいが、行政の支援が必要だ。少しずつ無薬局を解消している

が、この問題に興味がない自治体もある」と課題を指摘。「地域住民がどのような状況にあるか都道府県で把握し、薬剤師会で協力できるところは協力したい」と対応を約束した。

一方、松本吉郎委員(日本医師会常任理事)は、「大病院が地域に患者を戻すことに一層取り組むことが前提」としつつ、「まずは薬局の数と偏在を是正すべき。病院薬剤師の不足も深刻で、国家資格取得後に医療機関での研修・勤務を義務づけるなど、臨床医並みの薬剤師教育の深化が必要」と訴えた。



薬のことなら 薬事日報ウェブサイト

『薬事日報』に掲載される記事を中心に、医薬業界のニュースサイトとして成長を続けています。読者の約8割が医薬業界に属しており、医薬業界のニュースサイトとしては最大規模に成長しています。医薬業界の情報収集にご活用ください。

「薬学生新聞」もウェブサイト公開中!!

<http://www.yakuji.co.jp>

薬事日報

検索